
一部50円です

おさむちゃん

彼は3つ歳上のいとこである。中学校を卒業して京都の電気屋に住み込みで就職した。朝早く起きて店の掃除をし、食事の後すぐに電気工事の仕事に出かけ、夕方には仕事を早退させてもらって、5時からの京都府立堀川高校の夜間部に通った。学校から夜9時に店に帰り、休む事なく10時までの1時間店の仕事をして、それから学校の勉強をする。店の兄弟子がいけずして、わざと仕事を遅らされ、学校を遅刻する事もたびたびあったと言う。当時、堀川高校夜間部の同学年は50人のクラスが3つあった。成績が悪いと落第させられるので、一所懸命に勉強した。勉強についていくのが大変だったそうだ。



高校を3年間で卒業し、お礼奉公を7年務めあげ24歳で独立した。その時、短期間ではあるが、私は大学生であったのでアルバイトで手伝いをした。彼は、一乗寺にあったアパートを借りて電気工事店を始めた。彼と私は自炊しながら店に寝泊まりして、クーラーの取り付け工事などをしていた。

彼の店は、経済の高度成長のおかげもあって、今日に至る34年間商売を続ける事が出来て、2人の子供は大学までいかせた。悪戦苦闘が続く崖っぷちの経営であつたらしい。正月に会った時、彼は、

「この歳になって、つくづく思う。俺の人生はなんだったのか。社会のために何をしてきたのか？ これからは少しでもいいから、人の為に役立ちたい。蓄えもないし、わずかな年金しかあたらぬが、いつ死んでもおかしくない今、人の為に尽くすことが自分を生かしてくれる唯一の生き方だ、と思うようになった。電気組合の役員も辞退したいが、なり手が無いから、もう一期受けることにしたわ。それと、欠員があれば保護司になって若い子の相談に乗りたいと思っているんや」

いとこの話を聞いて、彼は今も崖っぷちで頑張っているのだ、と私は思った。昨年のクラス会のあと二人で痛飲した土建業を営むS君も同じような事を言っていた。在日朝鮮人である事や不景気もあって、死んで保険金をもらおう、と幾度も考えたと真剣に言う。人生の辛酸を舐めて来たであろう二人が、たどり着いた悟りだと私は思った。ふたりとも、同じ人生の結論に至った道程を考えると、苦勞が人を育てるのだ、と納得した。(嘉)

連載 爺捨て山 29

梵店主

先日の懇親会で爺捨て山が話題になった。「そんなもん、現実を知らんから言うんやろ」と言ったご批判や、「もっと具体的に説明せな」などなど。

私は、病院で死ぬのが嫌で、山奥で野垂れ死にするのが希望である、と言ったが、皆さんの賛同を得るには至らなかった。

その中で唯一人、奥谷さんは心強い賛成の意思を述べられた。奥谷さんは、老人達の楽園である爺捨て山を実現すべく行動を起こそうと提案された。

氏の提案は、今後益々高齢化社会になる。その中で如何に楽しく死ぬか、他人任せにせずに、自分たちで考え、居心地のいい環境を作るべきで、名前はともかく爺捨て山とババ捨て山を合わせたパラダイスを作りたいという。その為には、経済的にも自立したものにしたいから、ワインナリーを造って、自分たちが飲む分と売って金を稼ぐ一石二鳥を狙って、家の庭に葡萄の苗木を20本植えることにした。昨年注文した苗木が春には届くので皆さんを招いて植樹したい。

ちなみに、葡萄の木は五年すれば実をつけるそう、ワインが出来るのは早くても5年先になるが、それまで元気に生きて是非美味いワインを飲みたい。なんとも心強い老人魂ではないか。

《ヒマラヤへの道 17》

ガラムツシユ峰 9

梵店主

明日のルート工作を心配しながら、よっちゃんと由べえの二人は五七〇〇のテントで夕食の用意を始めた。夏にもかかわらず寒い、眼下に見える山々が夕闇の中に霞んでいる。空にはかすかな星の光が見える。明日は天気良さそう

だ。乾燥した米を炊き上げた飯の上に、クリームシチューをかける、これがきょうの夕食だ。由べえは夕食を食べ終わると、いきなり

「ぼく、もう登れません。下ります」と言い出した。よっちゃんはびっくりした。

「なに言うてんや、どうしたんや？」
「もうついていけません」

よっちゃんは、由べえの言葉を聞いて、とっさに「しまった」と思った。

この遠征隊は、急ごしらえであったので、いろいろと無理があつた。準備期間も短く資金不足もあつて、強引におし進めてきていて、場当たりの作戦もあつて隊員それぞれが、大きなストレスを抱え込んでいたのである。よっちゃんは、気が付いていたのだが、だまされまじや

れば登山中はやり過ぎしていきると、タカをくくっていたのである。

ところが、由べえの言葉を聞いて、「この期に及んで、やはりダメか」と心の中で悔やんだ。明日、うまくいけばピークに立てるかもしれない大事な今、彼の言葉は、よっちゃんには絶望的に響いた。

「僕、もう村松隊長には、ついていけません。がんばってやってきましたが、もういけません」

由べえは、目に涙をうかべ、これまで胸にたまつた思いをよっちゃんに一気にほき出した。

テントの中は、一本のロウソクが微かな明るさを保っている。明日の行動を考えれば、早く寝なければいけないが、突然の由べえの言葉がすべてを溶解し、これまでの苦労や、明日から起きるであろう隊員同士のもめ事を想像すると、よっちゃんは言い知れぬ虚無感に襲われ、由べえに対する言葉さえ思い浮かばなかつた。

隊長は、隊員の中で唯一経済的に自立した社会人である。大学を卒業して大手機械メーカーに勤めるエンジニアであるから、隊員負担金も払い、装備の寄付依頼も精力的にやり隊長としての努めはよくやっていた。隊長は、よっちゃんに「在学中は、学

を卒業すれば、アルピニストとして対等な関係になるのだから、上下関係はない。互いに自己責任を持つて山登りをしよう」といつも言っていた。

確かに、隊長の言うことは理を得ているのだが、現実的にはそれぞれ隊員は、経済的、体力、技術などで見劣りすることは明白で、いきなり対等と言われても、うまくはいかない。互いの足りないところを補つていく「あうん」の呼吸こそが登山を成功させる秘訣なのであるが、隊長は、自分にも敵しいが相手に対しても敵しい傾向があつた。

由べえ、山猿、よっちゃんたちは、まだ学生気質から抜け出せずについて、隊長にとつては「頼りない奴ら」と写っていたのである。その上、三人が酒もタバコもやるのに対して、禁酒、禁煙を身上としていた事も問題であつた。隊長のいるテントの中では、タバコが吸えないのである。ささやかなストレスでも溜まってくると、いつか爆発する。よっちゃん、由べえの、うつむいた姿でタバコを吸う姿をみて、「どんな言葉をかけても彼の気持ちを変えざる事は出来ない」考えても妙案が浮かばないから、「とにかく、寝よう」と由べえに言いながら寝袋にもぐり込んだ。

「デクノボー」という生き方

——仏教は私たちの生活の中に深く根づいているように思うのですが、その教えはどのようなものか、と問われるとどうも心もとな。そこで、「仏と共に」を連載されている稲垣妙淳さんに、仏の教えについて、おもに法華経が説いている教えについてお話しただきたいと思ひます。

「和光同塵わこうどうじんという言葉があります。お釈迦さまが、人々を救うために本来の姿を隠し、大黒さんや弁天さんなど、その時々々に姿を変えてあらわれることです。お寺の中に大黒さんなどの像を飾っているのはそのためです」
——どうして七福神のような神さんに姿を変えられるのですか？

「お釈迦さまの姿であると、光り輝くあまりの神々しさに人々がおそれて、近づかないからです。そこで人々に親しみやすい神さんの姿をかりてあらわれるのです」

——お釈迦さまは、どのように人々を救いたと考へているのですか？

「お釈迦さまは、沢山の教えを説きました。その中で最も肝心な教えが法華経です」
——法華経はどんなお経で、どんな教えが説かれていたのですか？

「法華経は二十八品から成り立っていて、八万余の文字が書かれています。法華経は単なる紙に書かれた経文ではなくて、それ自体が生きもので、宇宙でもあります」へ

「奥深そうですね。難しそうですね。」

「大変奥の深い真理が説かれていま
す。私は長年にわたり法華經を学んで
きました。法華經はどのような教えを
といているのか、私の経験などをふま
えながら少しづつお話ししていきまし
よう。」

日本の偉大な法華經行者は、日蓮上
人、清水の次郎長、宮沢賢治の三人だ
と思つています」

「次郎長はそんなに偉いのですか。
偉い。次郎長は明治政府から頼まれ
て囚徒の世話をしたり、富士市の大湖
村で富士山麓の開墾をして、多くの茶
畑を作りました。そのとき次郎長は私
の実家に寝泊りしていたと母から聞い
たことがあります。蔵の中には、政府
から送られてきた千両箱を入れた長持
ちがあつたそうです。」

宮沢賢治が法華經の行者だとい
うのは……。

「賢治のつくつた詩の中に、みなさん
よくご存じの『雨ニモマケズ』がありま
すね。ちよつと読んでみましょう。」

雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ

丈夫ナカラダヲモチ

慾ハナク

決シテ驥ラズ
イツモシツカニワラツテキル

一日ニ玄米四合ト

味噌ト少シノ野菜ヲタベ

アラユルコトヲ

ジブンヲカンヂヨウニ入レズニ

ヨクミキキシワカリ

ソシテワスレズ

野原ノ松ノ林ノ蔭ノ

小サナ萱カキブキノ小屋ニキテ

東ニ病氣ノコドモアレバ

行ツテ看病シテヤリ

西ニツカレタ母アレバ

行ツテソノ稲ノ束ヲ負ヒ

南ニ死ニサウナ人アレバ

行ツテコハガラナクテモイ、トイヒ

北ニケンクワヤソシヨウガアレバ

ツマラナイカラヤメロトイヒ

ヒデノトキハナミダヲナガシ

サムサノナツハオロオロアルキ

ミンナニデクノボートヨバレ

ホメラレモセズ

クニモサレズ

サウイフモノニ

ワタシハナリタイ

デクノボーといわれる人間になりた
いということをやつたてているのです
が、その賢治の気持ちこそが法華經の
精神なのです」

(嘉)

「春が来る」
サラリーマンエッセイ 36

明石 幸次郎

前回は日めくりカレンダーを毎朝見
ながら、その日の季節を知ることや、
その日が何の日かを確認することで、
その日を大事に過ごす事を習慣にし
たと書きました。

季節と言えば、先月は大雪が降つた
りして、気温が零下の日もあり、厳し
い寒さが続き、当に「冬来たりなば春
遠からじ」で、春を迎える前の寒さで
ありました。やつと、このところ日中
は暖かくなつてきたようです。

ところで、寒い一月から春が終わる
四月末までの、四ヶ月の節氣を風が伝
える花便り(花信)として、中国では、
「花信風(かしんふう)」として、季節
を表わしています。中国文学者の井波
律子先生の解説によれば、小寒、大寒、
立春、雨水、啓蟄、春分、清明、穀雨
の八つの節氣にスポットを当て、更に
各節氣から十五日間(一氣)を三候に
分けて、一候(五日)ごとに風に伝
える花信(花便り)を割り振つたもの
であると言つておられます。具体的に
は、小寒から十五日間には五日ごとに、
梅、椿、水仙の三種の花が順々に咲く
とされていて、合わせると八氣で(小
寒〜穀雨まで)で二十四の花信風があ
り、それで二十四の花が順々に咲くこ
とになるわけです。次々に咲く花を
めぐるうちに、寒い冬が過ぎ、春爛漫の季
節となるということです。中国の唐の時代
の大詩人、白楽天は、これらの季節ごとの
花を七言絶句「春風」で次のように歌つて
います。

春風 先ず発く 苑中の梅
桜杏 桃梨 次第に開く
薺花 榆莢 深村の裏
亦た道う 春風 我が為に来る

この意味は、春風はまず御苑の梅花を開
かせ、桜(ゆすら梅)、杏、桃、梨を次々
に開花させる。かたや山深い村も薺(なず
な)の花や榆(にれ)の莢(さや)が開き、
村人は春風は我等のために吹いてきたと
喜ぶ(井波律子先生の解釈)

春風はいたるところに吹きわたたり次から
次へと花を咲かせ人々を喜ばせるという
ことを歌つた詩であります。ここでも、一
番の花信風は梅であることを歌つていま
す。

では、私としては、この季節を感じる為
に、来週(三月六日)の日曜日辺り、この
白楽天の歌につられて万博公園で春風を
感じ、梅を愛で、友と一献又一献と行きた
いものです。



無情

具志 清

拝啓 高井様のお言葉は、わたしをいつも心強くさせて下さいます。重ね重ね御礼申し上げます。

母は終戦直後の数年の生活の間に体を痛めてしまいました。わたしが小学二年生の頃から、しばしば療養のため帰郷しました。二、三週間、長い時には二、三ヶ月も寝たり起きたりしていました。すこし良くなると祖父母の農作業を手伝っていました。わたしにとっては母と一緒にいられたのは嬉しかったのですが、すっかり健康になると東京へ戻りました。また新しい仕事を探さねばなりません。

わたしは中学を出ると直ぐ働くつもりでしたが、母は、これからは女も高校ぐらいは出ないといけない、と強く進学をすすめました。商業高校の定時制へ入り、昼は町工場などで働きました。

母の最後の仕事は大きな料亭旅館の仲居でした。今、わたしが住んでおりますアパートへは、母がわたしとの生活のために職場の住み込みから移ってきました。

母には、親が考えていた相手がおりました。前にもお話ししました母の里の、班長さん、飯島という家の、次男でした。

信次さんというその方は母よりは二つ

上でした。長男、信蔵さんは既に御家庭を持っておりました。三人は幼い頃から実の兄と妹のように育ちました。

母は、その話のため京都から呼び帰された時、両親に、わたしの父のことを打ち明けました。飯島さんのお家の方々にも理解してもらいました。

後日、信次さんが出征することになり、母は、両親と共に飯島家の出征祝いの宴に招かれました。その翌朝、京都へ帰る母を、信次さんが峠まで送りました。

「信次兄ちゃん、ごめんね」と母は涙声で言いました。「いいんだよ、香織ちゃんが好きなのだから、俺のことなど気にすることないよ」「ごめんね」と母は泣きました。「香織、謝ることないって、俺たち、兄と妹のように遊んだものな、香織をお嫁さんに、と話があった時、初めは実感がなかったけど、よく考えてみると、俺は香織ちゃんがずっと好きだったから、いいなと思ったんだ」「うちも信次兄ちゃん好きだったわ、でも、お兄ちゃんと結婚だなんて、ちっとも考えてもなかった、でも、ごめんね」「いいんだ、いいんだ、未練たらしい事言ってしまった、俺の方が謝らなきゃいかんよ」「信次兄ちゃん、戦死なんかいやよ」「あ、生きて帰ってくるとも

殺されてたまるか」

峠道を下って行く時、信次さんは、立ちつくして母を見送っていました。そして曲がり角で母は手を振り叫びました。「信次兄ちゃん、飯島の小父さん小母さんのためにも必ず帰ってきてね！」

「お、おお！、帰ってくる、きつと帰ってくるぞおお！、香織も元気で頑張るんだぞう！」信次さんも叫びました。

飯島信次さんは大陸で戦死しました。母が信次さんの事を話したのは、わたしが高校二年の時でした。母は少し酔っていて目に涙を浮かべていました。

父の親友の安原修さんは同志社の学生でした。父とは母のカフェで出会い、直ぐに意気投合しました。アメリカ帰りの敬虔なクリスチャンでした。熊本市の出身で中等学校二年の時留学のため渡米し、サンフランシスコの親類の家に滞在し数年過しました。大学は日本を希望し帰国したのです。新島襄の思想と生き方に感応し同志社を志しました。それに熊本は同志社とゆかりが深いのですね。

新島襄がアメリカ留学から帰国し、明治八年にキリスト教主義を建学の理念として同志社英学校を創立した時、生徒

は八名でした。翌年熊本の熊本洋学校

から三十五名の生徒が同志社英学校へ参加し、同志社の草創期に貢献しました。以後同志社英学校は発展し、のちに同志社大学となるのですね。

安原さんも、わたしの父との交流もあり、父同様に迫害を受けました。父のノートには安原さんの取り調べの様子も書かれています。

「安原！、お前はアメリカが勝つ、と思っているのか」「わかりません」「では、わが国が勝つ、と信じるか」「わかりません」「なにいい！、この野郎！」と殴られる。「お前は日本人ではないのか」「日本人です」「然らば、どうすると言うのだ」「はい、講和です」「こうわ？」「両国話し合って講和を結び一日も早く戦争をやめるべきです」「なんだとう！、この野郎！」ここでまた殴られる。

父は言っていたそうです。「日本は大変な国と戦争を始めたものだ。彼我の国力や地理的条件を検討すると、とても勝てる相手ではない」

安原さんは父よりは早く京都を離れました。熊本へ帰る前に父を誘って東

山の若王子山へ登りました。山頂に同志社校祖新島襄のお墓があります。安原さんは墓前に立ち、報告しました。

「新島先生、私は、自分の祖国日本と同様に愛しているアメリカの人々と、



新島襄(1843-90)

「戦うために海を渡ります。御赦し下さい」

父は友の悲痛な感情を思い、胸が詰まりました。

その数日後、父は熊本へ帰郷する安原さんを京都駅で送りました。

「安原、死ぬんじゃないぞ、どんな事があっても……」うん、北越もな、君には香織さんもいることだし……「ああ、お互いに絶対に生き抜こう……」

「おお、また京都で会おう……」安原！、約束したぞ、『京都の山河は、清（さや）かに、守らん』ためにも死ぬんじゃないぞ……

「そうだなあ……」と安原さんは微笑しました。北原白秋作詞の同志社大学歌に、『京都の山河は、清かに、守らん』という言葉があるのです。

二人は発車間際の車窓の内と外から固い握手を交わしました。西へ去りゆく汽車を見送りつつ父は、小さな声で同志社大学歌を歌いました。

安原陸軍少尉は南洋で戦死しました。戦後二年程経ってから母は、ある人を通じて知りました。北越海軍少尉の戦死の時期と殆ど同じだそうです。堅く誓った約束が果たせぬまま死に臨み、親友二人はそれぞれに無念だったでしょう。

母は、思い出を語る時、言ったことがあります。

「お国は、いい男たちの命を、いとも

簡単に奪ってしまうのね、戦争って無情なものね」

東京では、母を姉さんと呼んでいました。二十の年齢差は、周囲にはそれ程の違和感はなかったようです。高校を出ると小さな商社の事務員になりました。二、三年経った頃、取引先の青年と知り合い、やがてお互いに結婚を意識するようになりました。母に紹介し、青年の御両親とも会いました。そうなることややはり本当の事は打ち明けねばなりません。結局、相手の御両親が此方の家庭環境を問題にし、破談となりました。母は青年の態度を非難していましたが、わたしは割合に平穏でした。しかしその後は妙に会社に居づらくなり、間もなく辞めてしまいました。

そして母の職場の事務の要員として働くことになりました。よく考えて見ますと、隠すのがいけないのです。母は悪事を働いたわけではないのです。あのような時代、仕方がなかったのです。わたしがこの世に生を享けたことは運命なのですから仕方がないではありませんか。ですから隠して生きてきた私たち母子が悪いのです。それから母を、お母さんと呼んで、堂々と生活することにしました。

母には周囲から度々再婚話が持ち込まれましたが、全て断り続けました。いろいろな男性が去来しました。中に

は誠実な人もいて、時には心が揺れたこともあったようです。

「京子のために頑張ってきたのよ」と母は笑い顔で言ったことがあります。わたしも笑って返しました。「ありがと、おかあ、いや、お姉さん。でもね、姉が早く片付いてくれないと、妹が困るんだなあ」「なによ、生意気言うんじゃないよ」と母は笑いました。

本日は、母の事だけでなく、自分自身の振られた話まで臆面もなく書いてしまいました。失礼致します。暑い盛りです。どうぞお体お大事にお過ごし下さい。

かしこ

俳句

土田 裕

○ 春宵や妻に勧める食前酒

○ 古希過ぎて闘志あらたや木の芽晴れ

○ 里の闇濃くしていくや遠蛙

○ 暖かや父の遺愛の文机

○ 日を包む蓄かかけて紫木蓮と

「もう一篇の詩」

44号で読んだ金子光晴の「かつこう」という詩は、僕にとって心の奥底にしまいこんである大切な詩である。また、次のような詩もつくっている。彼はス

カトロ愛好趣味をもっていたわけではない。十歳の頃には目覚めたという、女の肉体を食べてしまいたいほどの強烈な性欲につながっていると思う。滑稽な詩でもあるが、読んでみよう。

恋人よ。

たうとう僕は

あなたのうんこになりました。

そして狭い糞壺のなかで

ほかのうんここといっしょに

蠅がうみつけた幼虫どもに

くすぐられてゐる。

あなたにのこりなく消化され、

あなたの滓になつて

あなたからおし出されたことに

つゆほどの怨みもありません。

うきながら、しづみながら

あなたをみあげてよびかけても

恋人よ。あなたは、もはや

うんこになった僕に気づくよしなく

ぎい、ばたんと出ていつてしまった。



暖かい地域の輪

先日の「芥川だより」懇親会で参加者の薫女さんから、おもしろい話があった。

芥川町の近くの真上町の一角で数年前から始まった近所付き合いです。20戸ほどで構成する町内の組合で、親しい数人が中心になって花見会と月見会を年2回、近所の空き地で開くようになった。各自持ち込みで昼すぎから4時ごろまで楽しく過す。会の名前もなく決まり事もなく責任者を作ることもせず、立ち話からうまれた会であった。

数年つづけるうちに一泊二日の旅行で和歌山を案内したいと参加者の一人から申し出があつて、五軒の8人が参加した。旅行中、話が盛り上がりさらに親しくなつた。これまで出会つても挨拶しかしなかつたが、挨拶だけで終らず家族の事など恥かしがらず話すようになった。

子供や孫のことなど毎日の出来事を気楽に話すようになつていった。和歌山の旅で世話になつたよさんが急に病気になるが、入院することなく在宅療養を続けたい、という思いを受けて主人を介護して見送つた二人の後家さんが介護のアドバイスを申し出るなど、それぞれが助け合う雰囲気が強ま

っている。地震などの災害に見舞われた時の為に、各戸の物置に入れてある物の情報交換もして、水やスコップなどいざという時の備えも始めた。

今では、子供達が花見会の看板や準備などを手伝ってくれるようになった。月一度のあみものクラブも個人宅で続いている。行政に頼らなくても、身近な近所付き合いから出来るだけ居心地のよい地域を創りたいという住人が増えてきた。

信楽のタラオ地区に「命のバトン」という運動があるらしい。個人の情報を冷蔵庫の上に置いておき緊急の時に誰でも直ぐに分かるようにして救急救命を行なうとか。阪神淡路大震災の時に、震源地であつたにもかかわらず死者が出なかつたのは普段からの付き合いで、寝ている場所を近所の人が知っていたから助け出せた。

日頃の付き合いは、おかずや炊き込みご飯などの差し入れが気兼ねなく出来るまでになつた。昔、田舎ではあたりまえにしていた事であるが、久しく忘れていた大事なコミュニケーションである。昔の良き風習や爺ちゃん婆ちゃんの話していた事を思い出して、遠くの親戚よりも近くの他人が大事だということである。

自治会の多数決で決めなくても、近所の気の合う人と話して、家を開放し

て茶でも飲みながら我が家の心配事を

を
恥を忘れて話せば、相手も「うちも、そうなんよ。聞いてくれる」と旧知の友人に早代わりする。すぐに四、五人は集まる。急がずゆっくり暖かい人の輪が広がり深まっていく。(喜)

携帯エッセイ 29

「震災2」

震源が至近だったので地元の垂水が最激震地だと思つていた。しかし、それは早とちりだった。震源から東北東に活断層が走っており、その上が最も揺れた。私の家は活断層から外れていた。活断層という言葉はその時、初めて聞いた。それまではプレート地震しか知らなかつた。だから地震波は震源地から放射状に伝わってくるものだと思つていた。

それは思い込みだった。活断層の上に位置していた長田、三ノ宮、東灘あたりがとんでもないことになつていった。

ラジオでは家が倒壊し、死人が出ているという。第一報の死者数は七、八人だった。

「大変な惨事だな」

と思つた。しかしそれは序の口だった。死者の数はあれよあれよという間

百人になり、数千人になつた。

長田では火の手が上がつたというので近くの小高い丘に見に行った。東方の空に四、五本の黒い煙がたなびいていた。

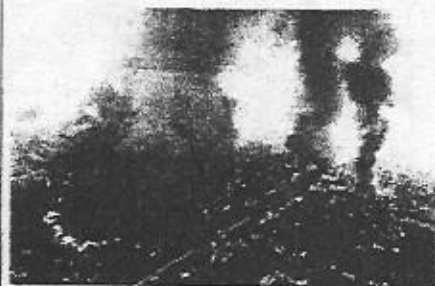
上空には二、三機のヘリコプターが回つていた。報道機関のヘリコプターだった。自衛隊や救助隊のヘリコプターは来ていなかった。

「間もなくやってくるだろう」と思い、帰宅した。

しかし、自衛隊のヘリコプターが神戸の空にやって来たのは、四日後だった。その間に死者は五、六千人に増えた。

災害救助は七十二時間(三日間)以内が勝負だと言う。阪神淡路大震災の救助は遅すぎた。

時のリーダーシップが余りにお粗末だった。村山首相と貝原知事が自衛隊による救助を早く決断すれば、多くの人が助かつた筈だ。私は今でもそう信じている。(龍)



姉が新たな危機に直面している。倦怠期だ。夫のガンの療養の倦怠期。「の」だらけの文章だが、こうとしか表現のしようがない。

お正月前後から、肺ガン療養中の義兄が咳をしたり、不調を訴えているということで、私たちはかなり心配した。毎月、定期的に森ノ宮成人病センターで検査を受けているし、先端医療のCSクリニックというところには毎週、高濃度ピタミンC療法を受けるために通っているのだが、「どうも胸のあたりにガンが広がっている感じがする」と言い出し、「骨にも異常が」と言うものだから、まさかとは思いますが検査の結果が出るまでヒヤヒヤしていた。が、結果は「セーフ！」。

これは、クリスマスプレゼントとお年玉がトラックで運ばれてきて、見上げれば五月晴れ(たとえ何月であっても)というぐらいハッピーなことだと思っただが、姉は何だか機嫌が悪かった。義兄の体に問題がなくて(再発という言葉を使いたくないので。いま、使ってしまったけど)、姉は私の千倍はほっとしたと思う。その反動なのか、よくわからないが、姉は怒っていた。

「CSの先生が言うてくれてはってん。『これはガンではなくて、検査の手術の

後遺症のようなもので、心配はない』って。しやけど、本人が『イヤ、違う』って、成人病センターでたいそうに言うてんやろな、いろいろ検査して、成人病センターの医者が『いま、これを再発というには当たらないと思いますよ』と言うたから、やつと納得しやうてん」

姉の怒りのほこ先は「検査の手術の後遺症のようなもの」を残した成人病センターではなく、「たいそうに言うて」何回もレントゲンを浴びたがる、わが夫に向けられていた。

「だって、抗ガン剤で血管はボロボロ、肝臓も腎臓も弱ってるし、いまでさえ、十分ガタガタやのに、レントゲンとか何枚も撮ったら、ますますダメーじ受けるやん。私、それが痛ましいねん」。

わかる。しかし、現実には「再発かも」と思えば、しっかり検査を受けて、対処していくしかないのも事実だ。姉にそう言ったら、「だって、CSの先生が『再発と違う』と言いはったんやから、それを信じたらええんちゃうん? それに、私、毎日見てるから、ほんまに具合が悪いかどうか、わかるねん。ごはんの食べ方で、パクパク食べてんねんから、毎日」。

「ごはんがパクパク食べれたら大丈夫」という姉の素朴な判定は相手に寄って異なる。義兄は普段から食いし

んぼうではなく、食も細いほうだ。そういう人がしっかりおいしそうに食べていけば「大丈夫」。以前、私が風邪を引いて、まあまあ元気だったので、「モノもパクパク食べられるから大丈夫」と言ったら、「フラッグ(大食いの飼犬)もパクパク食べてるから大丈夫、と思ったけど、その日に死んだもんなあ。フラッグとかアンタは死ぬ前でもパクパク食べるやろうから、アテにならへん」と、心配? してくれただ。

ともかく、再発ではなかったという喜ばしい事態のあと、姉は「倦怠期」に突入した。

「私、もう、言うたよ」。「私、もう、言うたよ」とか「もう、言うてん」というのは姉のログセだ。きつと、だれか知り合いのログセがうつったのだと思う。というのには、「もう、言うたよ」というには、「ギリギリまで我慢していたけれど」とか「普段は言うたことがないけれど」が前提だが、姉は思ったことは即、その場で言うてしまうタイプだ。何が「もう」だと思いが、とにかく義兄に言ったらしい。「自分、もうちよつと自分の自然治癒力、信じたらどうなん? そんなにガンになりたいんか? 再発やつて言われたら嬉しいんか?」。わが姉ながらキツイ言葉だ。

でも、妹だから、姉の気持ちにはわかる。しよつちゅう病院に行つては「こうな

んですよ」「ああなんですよ」と症状を訴えて、何らかの進展を待っているような義兄の態度に姉がイライラする気持ち。姉は成人病センターのガン治療に懐疑的で、弱った体にレントゲンは毒だと信じきっているし、薬も注射も義兄を弱らせるだけだと思っているのだから、なおさらだ。「夜なんかぐっすり寝てるし、仕事にも行つてないから、いらんやろというのに、睡眠導入剤みたいなもんももらっているみたいやし」。いまも義兄がそんな薬に頼って寝ているとは思えないのだが、病院にいるころ、義兄は少し神経質になつていて、眠れないと看護師さんに訴えて、その種の薬をもらっていたことがある。義兄は、医者が出す薬が体の毒になるとはみじんも疑っていないよ

卯菟卯菟と

眠りはせぬぞ 今年こそ

不況不況で明け暮れた一年だったが、もうこの辺で、何とか良くなつてほしいと云うのが、私たちの願いです。しかし、よく考えてみると、悪い悪いと言いながら、さし当り日々の生活の中で、何に困っている事もなし。

楽な生活というけれど、現代の生活は楽ではないのだろうか。物を買うのに配給で並んで買ったり、代用品で我慢した時代に比べると、電話ひとつで何でも届けてくれる今日は極楽のようなもの、余り恵まれると、生活に工夫や努力がなくなつてしまひ、不平やぐちだけが残る。

長寿礼賛
○ 還暦(六十一歳)第二の人生これから
○ 古希(七十歳)老いへの坂へとさしかかる

○ 喜寿(七十五歳)一日一日よろこんで
○ 傘寿(八十歳)なんのまだまだ役に立つ

○ 米寿(八十八歳)もう少しお米を
○ 卒寿(九十歳)卒業式はまだ早い

○ 白寿(九十九歳)百の祝いがすむまでは

○ 茶寿(百八歳)百八煩惱焼きつくし
○ 皇寿(百十一歳)そろそろ、おいとましてもよい

おでんに入れたこんにやくも、串に刺せば、しゃんとなる。こんな事を笑って話しあえる友達を持つてゐる事が幸せです。

ああ、これが人生か

芥川の一隅に住むようになって六十有余年を迎えるという歳になった。

昭和四十年前後が、私が最もこの街と馴染んだときだと思う。

中央市場で子供をおんぶして用を足すのが、ひとときの気晴らしだった。線路沿いの枕木を柵にした小道、あの電車で大阪へ、大阪から汽車で、又一時間バスに乗つて田舎へ、これは誰にも分からぬ私だけの感傷であつて、そこを通る時、いつも何やら切なくなるのだった。

高度経済成長の頃から、変貌は目を見らるものがあり、急激な変化を見てしまつた。

だが、気をつけてみると、かつての住所は跡方もなく、三十階建、十五階建が



首を揃えていて、威嚇さえ覚える。足腰が弱り、すっかり不精になつて日々衰えを感じるようになった。かつて思いもしなかつた事をしてゐる自分を思い、しみじみと、「ああ、これも人生というものか」とひとり呟くのである。

編集後記

第一回「芥川だより」懇親会報告です。2月13日、正午より芥川商協会で開催。参加者は男9名、女3名。年令は58歳から84歳。遠くは川崎、神戸からも参加者がありました。

卓上には、寿司、寒ブリの刺身、煮豆、甘夏、菓子類、蒲鉾、ビール、ワイン各種、樽酒、銘酒など、食べきれぬほどの美味な食べ物と飲みきれぬ量の酒類。

簡単な自己紹介の後、直ぐに乾杯し宴会を始め、参加者がそれぞれ思いを誰に遠慮することなく言い合いながら、話題は盛り上がりま

「これだけ好きな事を言つて、心がすつきりした事はないわ」

「おもしろかつたわ、来年も来たい」

「とにかく、つづける事が大事だ」

「かるい気持ちで参加したが、参加者が良くて(芥川だより)を見直した」

「芥川だよりは、芥川地域の情報をもつと発信したらよい」

「放送大学で哲学を学んでいるので、十七世紀のイギリス産業革命がどうして起こつたか書きたい」

「ボケ防止のために俳句を始めました」

「今書いている小説はあと三回で終わる予定です」

「私は、編集の仕事をしているから、金にならない文を書くのは抵抗あつたが、書く以上はキラリと光る文を書いて、読む人に何か役立つて欲しいから、これからも書き続けたい」

参加者の皆さんが言われた一部です。酒がまわり正確な事は、聞き忘れました。2次会はカラオケで楽しみました。

(嘉)

芥川商店街

春の大売出し

3月19日~23日

☆

『人気のデザイン』

8

ロングドレス

*

着物の留袖で作ると軽くて足さばきがよく、披露宴やパーティーで着付が簡単だと好評です。

着物から服を仕立てます

梵~ぼん~